# -ing 名詞化における項構造の継承について：統語構造から継承性を予測する*

山田昌史

*神田外語大学言語科学研究センター*

本論文では、Randall 1988 等の指摘する-ing 名詞化における項構造の継承の問題を取り上げ、項構造の引き継ぎの可否は、統語構造から予測可能であることを提案する。Grimshaw 1990 の派生名詞の分類に従って-ing 名詞を観察し、-ing に含まれる事象性の有無が項の継承の可否を決める要素であると措定する。さらに、事象性を-ing に指定される統語素性として分析することで統語構造から項の継承性が予測されることを提案する。項の継承を許す Process -ing は、事象項素性をもつ-ing である。そのため、素性照合のために必要となる項を義務的に要求し、基体の項を継承しなければならない。一方、Result -ing は常に指示表現であるため、統語上認可の必要な素性をもたず、義務的な項の存在を前提としない。このため項の継承をしない。このように項の継承性は、Grimshaw が項構造に指定した事象性を統語素性として再解釈することで、統語構造から予測可能であることを提案する。

## Introduction

Randall 1988 は、(1)に定義される「継承の原理（Inheritance Principle）」を提案し、基体の項構造の継承の可否は、付加される形態素の性質によって決定されるとしている。

---

*本論文は、第 20 回日本英語学会スチューデントワークショップ『項構造の継承について』（2002.11.16 於青山学院大学）において発表した「-ing 名詞化における項構造の継承について：統語構造から継承性を予測する」を基に、加筆・訂正を加えたものである。本ワークショップの企画をして下さった神谷昇氏をはじめ、ワークショップ発表者の田中江扶氏、長谷部郁子氏、司会者の外崎叔子氏に準備段階から様々なコメントを頂いた。また、長谷川信子先生には、この論文で中心的に論じている Uniformity の観点からの分析の可能性を指摘して頂き、本論文にとって大変重要な指摘を頂いた。

(1)Inheritance Principle

A category-changing operation which blocks the assignment of a theta-role blocks the assignment of all theta roles lower on the theta hierarchy.

Theta hierarchy: Theme >> Agent >> instrument, source, goal, path

(Randall 1988: 139)

具体的には、-er, -able のなどの基体の述語を名詞化、形容詞化するなど、基体の述語の範疇変化を引き起こす接辞の場合、基体の述語の項構造の一部のみしか派生された名詞、形容詞に引き継がれないことが説明される。(2)は-able、(3)は-er の例である。

(2) a. Calculus is learnable.
    b. These bolts are removable.

(3) a. a flier of rockets
    b. a herder of Holsteins

「継承の原理」により、(2)-(3)では基体の他動詞に-er, -able が付加され範疇変化が起こると、基体の項構造の一部の継承が阻止される。ここでは、agent 項の出現が阻止されている。そのため、(4)のように agent を表す項が明示的に出現すると非文となる。

(4) a. The plane is flyable (*by computer).
    b. the flyer of the plane (*by computer)

一方、un-, counter-などは、(5)のように基体述語の範疇変化を引き起こさないが、基体述語の項構造が派生された述語にも継承される。

(5) a. Mary had to tie the knot with an icepick.
    b. Mary had to untie the knot with an icepick.
    c. We balanced the weight with bricks.
    d. We unbalanced the weight with bricks.

接辞 un-, counter-は共に基体述語の範疇変化を引き起こさず、接辞付加

後も基体述語の範疇の性質が変わることがない。(5b) / (5d)のように、接辞付加後の述語は接辞付加前の述語と同じ項が現れている。つまり、範疇変化を起こさない接辞がついた場合、基体述語の項構造が保持されるのである。

しかし、基体述語の範疇変化が接辞付加により引き起こされるか否かが項構造の継承を決定するとは必ずしも言えない。以下に示すように、re-, over-などの接辞は基体述語の範疇変化を引き起こさないため、これらが動詞に付加しても派生される語は依然として動詞である。「継承の原理」に従うと、これらの接辞が付加され生成した動詞は、基体述語の項を継承することが予測されるが、以下の例が示すようにこの予測は正しくない。

(6) a. Henry estimated that the distance was 1/2 mile. (V CP)
b. *Henry reestimated that the distance was 1/2 mile.
c. Mary reestimated the distance.

(7) a. The crossing guard directed the kids to stop. (V NP to VP)
b. *The crossing guard redirected the kids to stop.
c. The crossing guard redirected the kids. (Randall 1985:12)

(6)の基体の動詞 estimate は CP をその補部に選択できる。しかし、re-が付加された語の reestimate は基体の範疇変化を生じず、依然として動詞のままであるが基体の動詞の項構造を保持できず、CP を選択できない。(7)も同様である。基体の動詞 direct は、theme 項と不定詞節をその補部に選択する。re-が付加された redirected は、direct と同様な項構造を持たず、theme 項のみしかあらわれることはできない。また、over-は、基体の動詞に付加すると新たな項を付け加える。つまり、基体動詞を自動詞から他動詞へ変える働きを持つ。

(8) a. John ran.
b. *John ran Bill.
c. John outran Bill.

(8)の例が示すように、本来、自動詞である run が、out の付加によって新たな Theme 項をとることが可能になっている。「継承の原理」ではこのような基体の接辞付加によってもたらされる新たな項の発生に関しては予測できないのである。

このような事実から、基体述語の範疇変化を伴わなくても述語の項構造に変化を引き起こす接辞が存在するのである。これらの接辞に特徴的なのは、基体に付加することによって基体に意味変化をもたらすことである。このことから、項構造の継承は、範疇変化だけではなく、接辞付加によってもたらされる何らかの意味変化を考慮に入れないと捉えられないと考えられる（大石 2000、島村 1990 など参照)。

本論文で中心的に論じる-ing 名詞句は、基体の動詞が名詞へと範疇変化することによって項の継承がなされるものとなされないものがあることが指摘されてきた。範疇変化後の名詞の表す意味内容により、項の継承の可否が決まるとされる。「結果（Result)」を表す-ing 名詞と「過程（Process)」を表す-ing 名詞の２つであるが、後者のみが基体の項構造を継承する。

(9) a. the cooking (*of Indian food) was starchy.
b. the typing (*of the manuscript) is on the desk.
c. their finding (*of the fossils) appeared in Science.

(10) a. the photographing of insects
b. the spectroscoping of stars
c. the telescoping of time

(9)のような「結果」を表す-ing 名詞は、項の継承がなされず、theme 項の表出が不可能であるが、(10)のような「過程」を表す名詞は基体の項構造を継承し theme 項の表出が可能である。Randall 1988 は、この２つの-ing の違いには言及しているが、どのような意味的違いが「結果」と「過程」の違いであるのか明確な定義はしていない。つまり、基体の項構造の引き継ぎに意味変化が関わることは暗にみとめているがその意味とはどんなものなのか明確に示していない。

本論文では、-ing 名詞句を取り上げ、項構造の引き継ぎの可否が意味的要因で決まる際の明確な定義を提出する。具体的には、Grimshaw 1990 の提案する基体述語のもつ事象構造（Event structure）に注目し、項構造の引き継ぎの可否を決めるのは、基体が事象性を持つかどうかの違いに帰すことを主張する。つまり、-ing が事象性を必要とする場合は、その事象性の認可が必ず統語上でなされなくてはならず、項が必ず必要となる。事象性の認可のために義務的に現れる項は、基体述語が持つ項である。一方、-ing が事象性を帯びない場合には、統語部門で義務的に認可される必要のある要素がないため、項が継承される必要がない。本論文の提案により Randall 1988 の提案する項の継承性は、事象性と言う意味的要因によって再解釈され、また、その意味要素を統語素性として分析する事で統語部門において継承性が予測できることを主張する。

本論文では、まず、Grimshaw 1990 の主張する派生名詞句の分類を用い、-ing 付加によって派生される名詞句は、事象性をもつか否かで分類されることを見る（第１節）。その後、述語の事象性と統語論の関係を探る Borer 1998, van Hout 1998 等の分析を踏まえ、２つの-ing 名詞句を生じる統語的メカニズムを議論し、本論文の分析から予測されることがらについて議論する（第２節）。最後に、本論文をまとめる（第３節）。

## 1. -ing 名詞化と基体動詞の項構造の引き継ぎ

本節では、Randall 1988 の主張する継承の原理にとって問題となりうると考えられる現象である-ing 名詞句について、その項構造の継承の可否について考察する。-ing 名詞句では、基体の動詞の範疇変化を伴うことから、Randall 1988 の継承の原理に従うと基体述語の項構造の引き継ぎに制限がかかるはずである。しかし、継承の原理が予測する通りに項構造の引き継ぎが阻止されるものと、それに反して述語の項構造をそのまま引き継ぐものと２つの種類があることが知られている。Randall は前者を result -ing（「結果の-ing」）、後者を process -ing（「過程の-ing」）と呼んで区別し、result -ing のみが(1)の定義に従い、基体述語の項の継

承が阻止されると説明する。一方、process -ing は、範疇変化を引き起こすにもかかわらず、項の継承が阻止されない。

(11) a. the herding of Holsteins
b. the autographing of programs
c. the healing of the sick
d. the writing of speeches
e. the photographing of insects (Randall 1988:131)

(12) a. the cooking (*of Indian food) was starchy.
b. the typing (*of the manuscript) is on the desk.
c. their finding (*of the fossils) appeared in Science. (*ibid.*: 134)

これら２つの-ing 名詞句の事実を説明するために、Randall は、意味的な変化を引き起こす接辞も項の継承を阻止するとする。しかし、Randall 1988 は、この意味変化とはどんなものであるのか、その実体についての詳細な記述はなく、単に Result/ Process と２つの-ing の意味の違いが項の継承の可否を決めるとしている。本節では、まず、基体動詞の事象性の違いに注目し、２つの-ing の項の継承の可否を決める意味的要因について議論する。

Grimshaw 1990 では、派生名詞句には大きく分けて２つのタイプ、事象名詞（Event nominal）、結果名詞（Result nominal）がある[1]とし、それぞれ統語的振る舞いが異なるとしている。まず、基体動詞の項の具現化が義務的に必要となるもの（事象名詞）とその必要のないもの（結果名詞）の違いである。

[1] Grimshaw 1990 では、基体述語の継承性の差に注目し、事象名詞をさらに、複雑事象名詞（Complex Event nominal）と単純事象名詞（Simple Event Nominal）に二分割し、全体として、３つのタイプの派生名詞が存在することを議論しているが、本論文では、Grimshaw の三分割を受け入れるものの、議論の際は複雑事象名詞と単純事象名詞の２つをあわせて事象名詞（Event nominal）とし、-ing 名詞は「事象」「結果」の２つの対立とする。

(13) a. The expression is desirable.

b. The frequent expression *(of one's feelings) [2] is desirable.

(14) a. The assignment is to be avoided.

b. The constant assignment *(of unsolvable problem) is to be avoided.

(Grimshaw 1990:50)

共起可能な冠詞にも違いがあり、また、複数化の容認度の違いも見られる。

(15) a. They observed the / *a / *one / *that assignment of the problem.

b. *The assignments of the problems took a long time.

(16) a. They studied the / a / one / that assignment.

b. The assignments were long. (*ibid*: 54)

また、アスペクトを示す修飾語と共起できるかの違いもある。

(17) a. the total destruction of the city in only two days appalled everyone.

b. Only observation of the patient for several weeks can determine the most likely ...

(18) a. *Jack's trip in / for five hours was interesting.

b. *the process in / for five hours (*ibid*: 58-59)

まとめると以下のようになる。

| | 事象名詞 | 結果名詞 |
|---|---|---|
| 1. 基体動詞の項の具現化 | √ | * |
| 2. 複数化 | * | √ |
| 3. アスペクトを表す語の付加 | √ | * |

[2]これらの例に表れる形容詞、frequent と constant は、両者とも事象性を強く含意するものであると、Grimshaw 1990 は述べている。本論文も Grimshaw に倣って、派生名詞が結果・事象の両方の意味を含意できる場合は、事象の意味を表す例の方にこれらの形容詞をつけて、過程の意味を表すこととする。

上記３つの観点から、-ing 名詞句を観察する。まず、基体項を義務的に必要かどうかの差であるが、前節でも述べたように、Randall のいう Process -ing は、基体の動詞の項構造を継承するが、Result -ing は、それを継承しない。つまり、Process -ing は、項を義務的に要求する。Process -ing に現れる of 句が項であるか否かは、以下の例によって示される。

(19) a. Their attacking was on the business distinct.

b. *Their discussing was of the issue of environmental problems.

（伊藤・杉岡 2002: 74）

付加詞は主要部から切り離すことが可能であるが、項は不可能であることはよく知られている。(19b)の非文法性から、of 句が-ing 名詞の項であることが明らかとなる。

また、以下のように、項構造の継承を許す Process -ing は、基体の動詞が共起を許す付加詞とともに現れることが可能である。一方、Result -ing はそれができない。

(20) a. the flying of planes (into wind) (from London) (to Paris) (by pilots with death wishes)

b. the cooking (*of Indian food) (*with special techniques) (*in authentic ovens) was starchy.

つまり、Process -ing は事象名詞と、Result -ing は結果名詞と性質を共にする。

次に、冠詞の種類・複数化の可否の事実を観察する。以下は、Roeper 1987 が指摘する事実だが、Process -ing の場合、(21)のように複数化できないが、Result -ing は可能である。

(21) Process -ing

a. the building of towers

b. *the buildings of towers

c. the earning of respect

d. *the earnings of respect

(22) Result -ing

a. the leaving of Rome

b. the leavings of Rome (=nonactivity)

c. the cutting of the lawn

d. the cuttings of the lawn (cuttings = grass, i.e., result)

(Roeper 1987: 282)

最後に、アスペクトを表す修飾語との共起関係をみる。以下のように、Process -ing は、アスペクトを表す修飾語と共起可能である。

(23) a. the destroying of the city in / *for two days

b. the observing of the patient for / *in several weeks

c. the constant shooting of the hunters

上記で観察した事実から帰結として得られるのは、Process -ing は、事象名詞と同様の振る舞いを示し、Result -ing は 結果名詞と同様の振る舞いを示す。つまり、Randall が Process / Result と区別した２つの名詞は事象名詞か結果名詞かという Grimshaw の２つの分類で捕らえられることになる[3]。

Grimshaw 1990 では、以下に示すように、事象名詞は、項構造(Argument Structure) の要素として事象項 (Event Argument) をとるが、結果名詞は、事象項が必要のない指示的な名詞句であるとして以下のような事象構造を提案している。

---

[3]ここまでの議論において、Process -ing は、事象名詞、Result -ing は結果名詞であるとの結論に至ったが、今後の議論の中では、２つの-ing は、Randall 1988 が使う Process / Result の２つの呼び名で呼ぶことにする。

(24) a. [Ev (x, y) ] (Event nominal)

b. [ R ] (Result nominal)

この Grimshaw 1990 の分析を援用すると Randall 1988 が Process -ing と呼ぶ -ing は、その特性として事象性を持つが、Result -ing は、その性質を持たないと考えられる。つまり、これら２つの-ing の意味的違いは、事象性を持つか否かの違いに帰すことができるのである。

本論文では、以下の節で、２つの-ing それぞれの意味的特徴が統語構造に反映されることを主張する。近年の統語論と意味論の接点を探る分析（Borer 1994, Ritter and Rosen 1998, van Hout 1998 など参照）においては、事象性を語彙自体の性質と捉えるのではなく、統語上認可の必要な統語要素と捉える。これらの分析に沿って、本論文では、Process -ing は、統語上で認可の必要な素性を持つと仮定する。Process -ing に義務的に現れる項（Randall 1998 に従うと基体の述語から引き継がれる項）は、-ing に含まれる事象性の認可のために必要とされる項であると考えられる。一方、Result -ing は、(24b)より事象性を含意しないので、何らかの要素によって認可される必要がなく義務的な項が現れない。

以下の節で、-ing 接辞がその個癖的特徴として事象性をどのような形で統語部門において認可するのか、そのメカニズムを考察する。

## 2. 分析：-ing nominal の項の継承を統語構造から予測する。

前節までに、Randall 1988 が Process / Result の-ing とする２つの-ing は、事象を含意するか否かの違いに還元できることをみた。事象を含意できる-ing は、その事象性を統語上で認可する必要があるため、義務的に項が必要となる。一方、事象を含意しない Result -ing は、事象性を認可する必要がなく義務的に必要となる項がない。つまり、-ing 名詞句の項構造の継承問題は、-ing が義務的に事象項を必要とするか否かが重要な役割を果たすと言える。本節では、述語のアスペクト的の特徴を統語上で素性照合を介して予測しようという分析（Borer 1998、van Hout 1998、Ritter & Rosen 1998 など参照）に従って、前節までに導きだした-ing 名

詞句の意味的制約を統語構造に統語素性として組み入れることで、-ing 名詞句における項の継承性を統語構造から予測可能であることを提案する。つまり、前節でみた Grimshaw の事象名詞の持つ事象項を統語上で認可が必要である素性として再解釈することで項の継承の違いを素性照合が適切に行われるか否かの違いとして、分析できることを提案する。

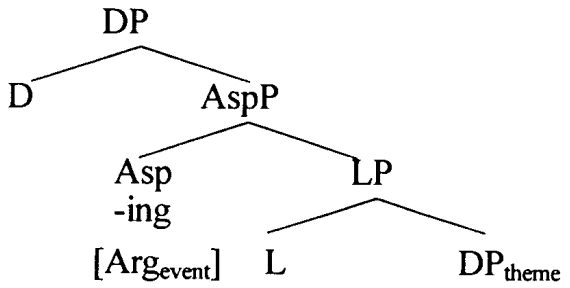
## 2.1. Process -ing の統語構造

### 2.1.1. Analysis

1節では、Process -ing は、事象を含意するが、Result -ing はそうでないことを観察した。この違いを捉えるために、本論文では、述語のアスペクト的特徴を機能範疇内での素性照合や格の照合と附随して起こる素性照合の一部として統語構造から述語の意味的特徴を予測することを試みる分析（(Borer 1998、van Hout 1998、Ritter & Rosen 1998 など参照）に従って、事象性を派生に関わる形態要素の統語素性として捉え、Process -ing はその素性として統語上で認可が必要な素性 (事象項素性 (event Argument feature(=$Arg_{event}$)))を持つと仮定する。また、この事象項素性の認可には、Chomsky 2000 の主張する移動を伴わずに素性の照合を可能にする一致（Agree）の操作を用いる。この一致操作によって、事象項素性が正しく認可された場合のみ、Process -ing が派生する。

本論文の提案する Process -ing の統語構造は、以下である。

(25) Process (Event) -ing 統語構造

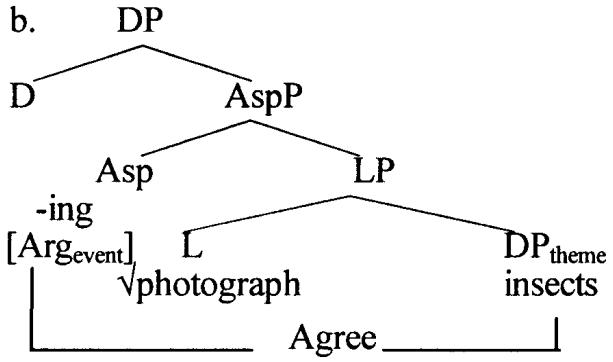



Alexiadou 2001 等の提案する名詞句の分析に従って、-ing 名詞化の基体の要素は、Marantz 1997 が提案する中立範疇の L である。ここでは、-ing

接辞が名詞化の機能を担う機能範疇の主要部[4]をなし基体 L を名詞に機能させる。(25)において、Process -ing を生成する主要部に現れる-ing は事象性をもつ LP を直接選択する。基体の事象性は統語構造における素性照合によって決定されるとする van Hout 1998 の提案に従って、-ing に含まれる事象項素性が必ず素性照合されないと派生が収束(converge)しないとする。そのため、-ing の $Arg_{event}$ は、L の補部に併合(merge)する項によって、一致操作に基づいて移動を起こさずに認可される。具体的な例を以下に示す。

(26) a. the photographing of insects

b.




(26)では、事象項素性を正しく認可できる要素は、事象性をもつ L が内項としてとる要素 insects である。述語のアスペクト性、事象性は動詞自体の特性とは言い切れず、動詞とその補部などの要素を含めた述語によって決定されることが指摘されている（Tenny 1994 等参照）が、本論文でもこれらの先行研究を踏まえて、L と L が直接選択する補部、また LP を形成する要素によって LP の事象性が決定されるとする。LP の事象性の決定に関わった全ての要素が事象性をもつと仮定する。そのため、Process -ing の事象項素性は、事象性をもつ L の補部の DP である insects によって、-ing に指定された事象項素性を一致操作に基づいて移動を介さずに適切に認可できる。このことから、Process -ing は、事象性を持

[4]本論文では、この-ing を主要部に持つ機能範疇を-ing の未完了アスペクトの性質から、van Hout & Roeper 1998 に従って、AspP としておく。詳細は van Hout & Roeper 1998 を参照。この機能範疇に指定される要素の違いにより、受動名詞句の派生が説明がつくことが、2.1.2 節で示される。

ったLPを直接選択しなければ派生されないことが帰結として得られる。この分析から、以下の２つの事実が説明される。

まず、状態性を持つLPは、-ing名詞化できない。

(27) a. *John's resembling of his father
b. *the having of this book (Bland 1985:11)

本論文では、Process -ing は、事象性をもつ LP を選択すると仮定するので、状態性を持つ LP は、Process -ing に選択されることはなく、このような-ing 名詞は派生されない。同様なことは、以下のような inchoative にも当てはまる。

(28) a. the (rapid) melting of the ice
b. the (rapid) freezing of the lake
(29) a. ?the dropping of the stone
b. ?the arriving of the train (Grimshaw 1990: 122)

Grimshaw 1990 は、対応する他動詞が存在しない unaccusative より他動詞形をもつ inchoative の方が、文法性が高いことを観察している。Grimshaw は、この文法性の違いを基体動詞が動作主の存在を含意するものの方が-ing 名詞化がしやすいとする。しかし、本論文の基体の事象性の違いが文法性の差異を引き起こすとする分析により、自然な説明が与えられると思われる。つまり、事象性の含意を持つ(28)の LP は、Process -ing に選択されるが、(29)は事象よりも結果に主たる視点があるために事象性が乏しく、（しかし、状態述語よりは事象性が強いため）Process -ing に選択されるが、文法性が落ちると説明される。

本論文が提案する Process -ing が事象性もつ LP を選択するとの分析を支持する２つ目の事実は、Process -ing が事象コントロールが可能であるという事実である。

(30) a. the opening of the door in order to let air in
b. the sinking of the ship to impress the general （伊藤&杉岡(2002):76）

Process -ing が事象性をもつ LP を選択するのため AspP 以下が全体として事象性を帯びていると考えられる。このため、その範疇内に現れるコントロール節は事象コントロールされる。この事実も Process -ing は事象項の適切な認可の結果生じるとする本論文の主張を支持する。

また、本論文での-ing の事象項素性は L が直接選択する項であるとの提案から、二重目的語構文の場合、直接目的語は適切な一致操作の結果、Process -ing が生成されるが、間接目的語はそれが不可である事が予測される。以下の例が示すようにこの予測は正しい。

(31) a. *the handling of babies of toys[5]
b. the handling of toys to babies (大石 2000：4)

(31a)では、基体 handle の２つの内項がそれぞれ of 句として具現化しているが、この場合、-ing の事象項素性との一致を引き起こしているのは、間接目的語の babies である。この場合、非文法を生じている。一方、(31b)のように、直接目的語とのみ一致操作を起こしている(31b)は許容されることから、-ing の素性と一致できる要素は、L が直接選択する要素であると考えられる。

本論文では、前述の通り、-ing の事象項素性の照合が Chomsky 2000 の主張する一致操作によってなされると仮定する。この操作により DP の格照合も事象項素性の照合の相乗効果としてなされると考えられる。この分析から以下の事実が説明される。派生名詞の場合、(32)や(33)のように、基体動詞のとらない of 以外の前置詞と共起でき、また、theme ではない項に of が容認されず、of 以外の前置詞が現れることが可能である。

---

[5](31b)は、of の連鎖が文法性を落としているように感じられる。しかし、伊藤 2002 は、基体が of 句をとる剥奪動詞が-ing 名詞化した際、以下のような of の連鎖を許すことを観察している。

(i) a. They drained the tank of oil.
b. their draining of the tank of oil
c. John clean the table of dishes.
d. John's cleaning of table of dishes (伊藤 2002: 253)

このことから、 (31a)の非文法性は of の連鎖に起因するものではない。

(32) a. their discussion on the issues. (cf. They discussed (*on) the issue.)

b. You have to have a good control over your feelings.

(cf. you have to control (*over) your feelings.)

(33) a. the general's command to /*of the city

b. the refugee's flight from / *of the city

c. the soldier's entry into / *of the city

Grimshaw 1990 等は派生名詞においては、その主要部の名詞から直接 theta 役が付与されず、of などの前置詞を介して名詞の主要部の補部に theta 役と格が付与するとする。しかし、伊藤 2002 は、-ing 名詞は派生名詞とは性質が異なり、基体動詞がとらない of 以外の前置詞は現れず、常に of が default として現れることを観察している。(34)では、基体動詞がとらない前置詞は現れず必ず of で現れ、また、(35)では、基体のとる着点や起点も常に of として現れている。

(34) a. the mere bringing back and discussing of memories / *the discussing on memories.

b. the planning and controlling of projects / *the controlling over projects.

(35) a. there is a critical point known as passing the hump, before the reaching of which point the floats are definitely water-bound.

b. their frequent entering of the country

c. the leaving of Rome (伊藤 2002 : 232)

上記の事実から、伊藤 2002 では、of や他の前置詞によって theta 役付与される派生名詞とは異なり、-ing 名詞句では基体から直接 theta 役付与されるため、of は theta 役付与に関与せず、項を具現化するための統語的な要請から of が挿入されたものであるとしている。本論文では、この-ing 名詞に現れる義務的な of は、一致操作によって-ing の事象性が適切に認可されたことが格の標示として現れると仮定する。以下のように、動詞の内項が何らかの意味的制限を受ける時には、付与される格が異なることが指摘されている。

(36) a. Pekka rakensi talo-a.
Pekka-NOM built house-PAR
'Pekka was building a house.'
b. Pekka rakensi talo-n.
Pekka-NOM built house-ACC
'Pekka built a house.' (Pylkkänen 2000:421)

(36)では、rankensi 'build'が目的語に付与する格の違いにより、２つの意味が生み出される。対格を目的語に付与した場合(36a)は、述語全体が telic の解釈を持つようになり、「家を造る出来事が完了する」ことを意味する。一方、部分格が付与された場合(36b)は、そのような解釈を持たず、「(過去のある時期において) 家を造る動作が進行している」ことを示す。このことから、述語の意味内容によって付与される格が異なり、格の付与に述語の意味内容が強く反映されることが分かる。つまり、述語のアスペクト的な意味と格標示が何らかの一致を起こしていると考えられる[6]。同様に of を分析することで Process -ing に義務的に現れる-ing に対しても自然な説明が与えられると考えられる。本論文では、-ing の事象項素性の認可がなされると、(36a)と同様な内在格の認可により義務的な of が現れるとする。つまり、-ing の未完了アスペクトは、その認可の結果として of として内在格標示されることとなる。Chomsky 1986 などが提案する Uniformity Condition によると、このような内在格認可には基体の theta 付与が必要となる。この of の内在格付与が基体の theta 役の引き継ぎに関与していると考えられ、伊藤2002 と同様に基体の theta 役が直接項に対して与えられる。つまり、Process -ing では of は単なる格を付与する要素ではなく、事態が未完了であるというアスペクト的意味を基体が持っていることを内在格という形で表したものであると考えられる。この分析から、Process -ing に現れる義務的な of の事実に自然

[6] Ura 2002 においても、日本語の「VN をする」構文（この構文が可能なのは、基体の VN が非有界の意味を持つものに限られる）において、VN に付与された「を」格は、対格を示す「を」ではなく、VN と「する」の意味的認可が正しく行われたことを示す標示であるとの分析が見られる。

な解釈が与えられ、さらに、以下の２つの事実が説明される。

まず、以下のような Process -ing が(37)のように LP に結果を表す節が現れる場合と、(38)のように LP にコントロール節が現れると非文法となる事実が説明できる。

(37) a. *our painting of the house red
b. *our hammering of the metal flat
c. *our shooting of him dead (Abney 1987:144)
(38) *the expecting of John to leave

(37)と(38)の統語構造を以下のように仮定する[7]。

(39) a. [$_{DP}$ the [$_{AspP}$ -ing [$_{LP}$ paint [$_{XP}$ the house red ]
b. [$_{DP}$ the [$_{AspP}$ -ing [$_{LP}$ expect [$_{XP}$ John to leave ]

結果構文、コントロール構文のいずれも、XP を基体 L の paint, expect が直接選択し、XP に対して theta 付与をしている。一方、-ing の事象項素性の認可を行い、内在格認可を行う要素は、XP 内部の the house, John となる。つまり、内在格認可をなす要素が XP 内部に、theta 役を受ける要素が XP 自身となり、格照合と theta 役付与の要素が同一とならず、Uniformity 違反が引き起こされ、(37)と(38)の非文法となることが説明できる。

また、以下のようにイデオム解釈をもつ述語を基体とするものは、-ing 名詞化が不可能である。

(40) a. *Jerry's (carefully) keeping of tubs on Sherry
b. *your (constant) paying of attention to his lies (Baker 1985: 5)

idiom 解釈をもつ述語を作る基体の L は、直接項に theta 役を与えることができないため、基体が内在格の認可を行う要素に対して theta 役を

[7] 本論文では、小節、コントロール節が一つのかたまりをなし、全体として L に直接選択されることが重要であって、これらの節がどんな範疇を持つのかに関しては重要ではない。ここでは、それらの範疇を XP と示しておく。

付与できない。このため、Uniformity に違反し非文法性が生じると説明される。

ここまでの提案をまとめると、Process -ing を生成する-ing は事象項素性を持ち、その素性の認可を適切な要素によってなされなければならない。そして、その認可が内在項認可と附随して起こり、基体の持つ theta 役の受け渡しを内在項の認可が可能となった要素にのみ行う。つまり、Process -ing においては、事象項認可、それに伴う内在項の付与が正しくなされる場合のみ Process -ing が派生されることになる。結果的に、Process -ing の事象項認可に必ず項が必要となるので、基体の項を引き継がなくてはならないと考えられ、本論文での提案により Process -ing の項の継承が統語構造から予測できることとなる。

### 2.1.2. Extensions

2.1.1 節で、Process -ing において義務的な項の出現が統語構造から予測できるとし、その統語構造を提案した。しかし、本論文の一致操作によって Process -ing の事象項素性が認可されるとの分析では、以下の事実に対して明確な分析が与えられない。

(41) a. Stew-mixing (four hours / in an hour) is fun.
b. Door-closing (for hours / in five seconds) is a bad idea.
c. Glass-filling (for a minutes / *in a minute) is a silly way to make a living. (Di Sciullo and Tenny 1997)

(41)では、基体の選択する項が-ing 名詞に編入している。編入可能な項は、以下の例が示すように-ing が直接選択する項のみである。

(42) a. *student-giving of exams
b. *professor-giving of exams to students
c. exams-giving to students by professor (Di Sciullo 1997:20)

(41)の事実は、事象項の認可がどの範囲で起こるのか、また、一致操作以外の方法を用いて事象項認可が行えるのかを考える上で重要である。本論文では、(41)の事実を踏まえ、事象項の認可を一致操作による L の

補部位置だけでなく、-ing がその主要部を占める AspP の範囲内であれば事象項の認可が可能であるとする。つまり、-ing が個癖的にもつ事象項素性を認可できる項が認可が必要な-ing に直接編入した際も、事象項素性認可が可能であると、前節の分析を拡大する。もし、この分析が正しいとすると、事象項の認可に必要な項が事象認可が行える範囲外（つまり、AspP の外）に生じた際は、事象項認可が正しく行えず、非文法性を生じることが予測される。以下の例は、Process -ing の Theme 項が名詞句主要部の前位置に生起できないことを示している。

(43) a. the destroying of the city
b. the enemy's destroying of the city
c. *the city's destroying by the enemy

(44) a. the appointing of John by the committee
b. the committitee's appointing of John
c. *John's appointing by the committee (Bland 1985: 96)

(43c) / (44c)では、-ing 認可の可能な範囲の外側に、本来、-ing の事象項の認可を行うべき要素があるために、事象項素性の認可が適切に行えず非文となっていると分析される[8]。

一方、-ing 以外の接辞から作られた名詞句は、以下のように、名詞句主要部の前位置に Theme 項が現れることが可能である[9]。

(45) a. city's destruction
b. patient's examination

この違いは、AspP の主要部を占める形態素の性質の違いにあると考え

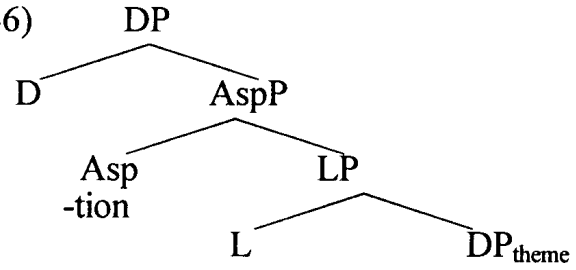
---

[8] 神谷昇氏（私信）から、Chomsky 2000 で提案されている CP や *v*P を演繹計算上・意味上の単位 Phase とする分析を援用し、DP を Phase とすることで D の complement の AspP が Spell-out の対象となることで、-ing の事象項認可の範囲を設定できる可能性を示唆していただいた。DP が Phase を形成するか否かの詳細な議論が必要だが、大変有益な指摘であるので今後の研究課題としたい。

[9] 受動名詞句の派性には、意味的な制限があることが Anderson 1979、 Tenny 1994 等で指摘されているが、ここでは深く考察しない。

られる。(45)の名詞句は、基体の名詞句が生成された後、Asp に Theme 項の移動を駆動する素性を持った形態素が生起すると仮定する。構造を以下とする。(Borer 1994, Alexiadou 2001 等参照)

(46)




（何らかの要請で）Theme 項の移動が駆動され、(45)が派生される。一方、ing 名詞化においては、Theme 項の移動が AspP の外側に駆動されることがない。つまり、AspP の主要部を占める形態素の性質の違いで(43c)/(44c)と(45)の文法性の違いが説明できる。

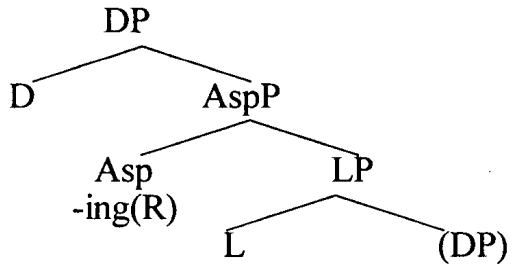
### 2.2. Result -ing の統語構造

1節で、result -ing は、結果名詞と同様の性質を持つものであり、事象性を持たず、基体述語の項構造を継承しないことを観察した。本節では、Result -ing の統語構造を提案し、項構造の継承性が Process -ing と同様に統語的に説明されることを示す。

#### 2.2.1. Analysis

本論文では、Result -ing は、以下の統語構造を持つと仮定する。

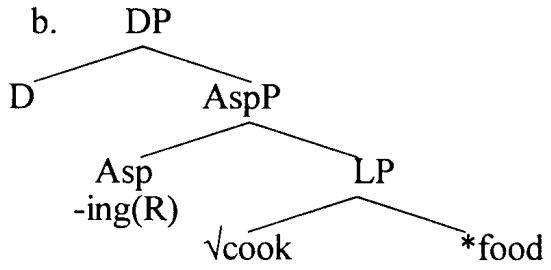
(47) Result -ing の統語構造




具体的な例は、以下である。

(48) a. the cooking (*of food) (=(9a))

b.




Result -ing は、その基体の-ing が指示表現（Referential Expression）であることを示す R を個癖的に持つと仮定する。このため、項を要求することはなく、常に基体の L を名詞にする働きだけを有する。認可に必要な項を可視的に必要としないので、義務的な項は現れない。しかし、以下のように、R と直接関係するような項が付加詞として表出することは可能である。

(49) Sightings of UFO's make Mary nervous.

(島村 1990 citing from Wasow and Roeper 1972 : 101)

この場合、-ing の持つ素性(R)と何らかの素性照合が可能なものが L の補部の位置に現れたことになり、Process -ing と同様に素性照合がなされ、正しく照合がなされると of が現れ、theta 役が付与されると考えられる。

### 2.2.2 Pluralization, revisited

Result -ing は、複数化が可能であるが、Process -ing はそれが不可能である事実に関して、本論文の提案はどのように説明するのか考察する。((21)-(22)を(50)-(51)として再掲)

(50) a. the building of towers

b. *the buildings of towers

c. the earning of respect

d. *the earnings of respect

(51) a. the leaving of Rome
b. the leavings of Rome
c. the cutting of the lawn
d. the cuttings of the lawn (Roeper 1987:282)

(50)が Process -ing の例、(51)が Result -ing の例である。上記のように文法差が生じる事実は、本論文では２つの-ing の意味的性質の差から説明できるものとする。Process -ing は、未完了アスペクトを担うものであるので事態が未完了である。未完了のものの数を問うことはできず、複数を表すことができない。一方、Result -ing は、その素性に R を含むので、通常の名詞句と同じであるので、その数を問うことができる。

### 2.3. まとめ

本節では、Randall 1988 が Process / Result と分類した２つの-ing の項構造の継承の違いは、事象性という意味的要素に起因し、その意味的要因を-ing の統語素性として再分析することによって説明できる事を示した。Process -ing は、事象項素性を持ち、その認可を基体の L の補部の位置に現れる要素によってなされなければならないので、項が要求される。一方、Result -ing は、その素性として R を持つが、この素性の認可には項が要求されないので、義務的な項の登場が前提とされない。本論の提案により、Randall の-ing 名詞化における項構造の継承の問題は、事象項の統語的認可の可否という形で再分析が可能であり、統語構造からその振る舞いの差が説明できことを提案した。

## 3. Conclusion

本論文では、-ing 名詞化における項構造の継承の問題を取り上げ、-ing に含まれる事象性の有無が項の継承の可否を決める要素であると措定して、事象性を統語素性として統語構造に取り込むことで項の継承性が予測されることを提案した。項の継承を許す Process -ing は、事象項素性をもつ-ing であり、この素性照合のために必要となる項を義務的に要求するために基体の項構造の引き継ぐ。一方、Result -ing は、常に指示表

現であり、義務的な項の存在を前提とせず、項の継承をしない。このように-ing 名詞句における項の継承性は、事象性と言う意味的要因を統語素性に組み入れることで統語構造から予測可能であることを提案した。

## References


Abney, Steven. 1987. *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral Dissertation, MIT.

Alexiadou, Artemis. 2001. *Functional structure in nominals: nominalization and ergativity.* Amsterdam: John Benjamins.

Anderson, Mona. 1979. *Noun Phrase Structure*. Doctoral Dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Baker, Mark. 1985. Syntactic affixation and English gerunds. *Proceedings of West Coast Conference on Formal Linguisics* 4, 1-11.

Bland, S. Kesner. 1985. *The action nominal in English*. Doctoral Dissertation, Cornell University.

Borer, Hagit. 1994. The projection of arguments. *University of Massachusetts Occasional Working Papers in Linguistics* 17: *Functional projections*, 19-47.

Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language*. New York, NY.: Praegar.

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: the framework. In eds., Martin, R., D. Michaels and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honnor of Howard Lasnik*, 89-156, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Di Sciullo, Anna-Maria. 1997. On word-structure and conditions. In Di Sciullo, Anna-Maria, ed., *Projections and Interface Conditions*, 3-27, Oxford, NY: Oxford University Press.

Di Sciullo, Anna-Maria and Carol Tenny. 1997. Modification, Event Structure and the word/phrase asymmetry. *NELS* 28, 375-389.

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

van Hout, Angeliek. 1998. *Event Semantics of Verb Frame Alternations*. Amsterdam: Garland Publish, Inc.

van Hout, Angeliek, and Thomas Roeper. 1998. Event and aspectual structure in derivational morphology, *MIT Working Papers in Linguistics* 32, 175-220.

伊藤たかね. 2002. 「二重メカニズムモデルと語彙情報の「継承」」 伊藤たかね（編）『文法理論：レキシコンと統語』 225-248.東京大学出版.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』 研究社.

Marantz, Alec. 1997. No escape from syntax: Don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon. *U. Penn Working Papers in Linguistics* 4.2, 201-225.

大石強. 2000. 「形態論と統語論の統合について」 『語彙特性と統語的反映』1-11. 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書. 筑波大学.

Pylkkänen, Liina. 2000. Stativity and causation, In eds., C. Tenny and J. Pustejovsky, *Event as grammatical objects: the converging perspectives of lexical semantics and syntax*, 417-442. Stanford, Cal: CSLI.

Randall, H. Janet. 1988. Inheritance, In, eds., *Syntax and Semantics* 21, 129-146. New York, NY: Academic Press.

Ritter, Sara and Carol, Rosen. 1998. Delimiting events in syntax, In eds., M. Butt and W. Geuder, *The Projection of arguments: lexical and compositional factors*, 135-164. Stanford, Cal: CSLI.

Roeper, Thomas. 1987. Implicit arguments and the head-complement relation. *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.

島村礼子. 1990. 『英語の語形成とその生産性』 リーベル出版.

Tenny, Carol. 1994. *Aspectual Roles and The Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.

Ura, Hiroyuki. 2002. Agree in syntactic word-formation: verbal nouns in Japanese and the syntax of their aspectuality, In Y. Endo, R. Martin and H. Yamashita, *Working papers in Biolinguistics 1: papers on Syntax and Semantics*, 39-98. Yokohama National University.

261-0014

千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

*myamada@kanda.kuis.ac.jp*